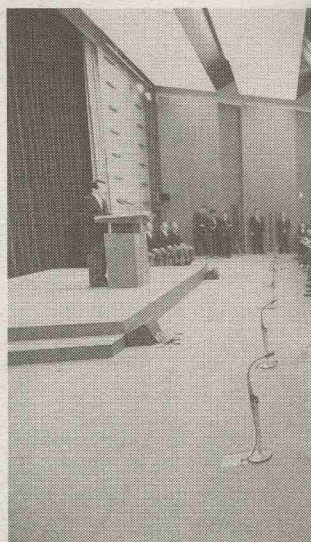




伝染 なぜ記者たちは機密費を受け取ってしまうのか

中には、マスメディアにも官房機密費が渡っていたのではないかとするような記事掲載している例もあります。しかし、朝日新聞社

についてはそのような事実はありません。自信があるなら堂々と内部調査すればいい。だが、これまで朝日新聞社内において、内部調査が行なわれた形跡はない。私の取材によれば、今日現在、朝日が内部調査を行な

う予定しないという。にもかかわらず「事実はありません」と言い切るのは、摩訶不思議な詭弁でしかない。

この追及キャンペーンも今回で第10弾となる。朝日新聞が完全にすり替えてしまった、官房機密費問題の本質。それを理解していただくために、改めて「論点」を整理しておこう。

される。若い記者2人は「いや、それは受け取れません」と断わるが、上司に「いや、いいんだよ。大丈夫だから」と促される。上司が率先して受け取る様を見れば、後輩としては断わるわけにはいかない。戸惑いつつも受け取ってしまう、これがはじまりだ。それがたとえ小さな額でも、記者が受け取った瞬間に、渡した側は「餌付け成功」と思うわけだ。

こうしてもらうことに抵抗がなくなり、ジャーナリストであるはずの記者は、機密費の毒に麻痺してしまふ。一方、受け取らない記者はどうなるかというと、上司に逆らう奴という評価を受けて、次の人事で政治部から追放される。ものわりのよい記者しか生き残れないシステムなのだ。

私が取材を続けるなかで驚愕したのは、一部の政治評論家にとどまらず、新聞・テレビの政治部記者にも機密費が配布されていたことだ。メディアの人間が官邸に「餌付け」され、機密費汚染がこれほどマスコミの広範囲に蔓延していたとは想定外だった。

も情報提供料でも名目は何でもいい、一度現金を受け取るように仕向けられしめたものだ。

功妙なその「餌付け」は、長年機密費の甘い汁を吸ってきたメディア幹部から、その部下へと継承される。良識あるはずの記者たちが、いとも簡単に「毒まんじゅう」を食らってしまう仕組みはどうなっているのか。

現場記者が集めた膨大な取材メモが、官邸に「上納」されていたという問題はその典型だ。現場の記者たちが夜打ち朝駆けをして各政党、派閥のキーマンなどからとってきたオフレコの内容が、政治部長や編集局長にあげられる。それを幹部

たちが、機密費と引き替えに官邸に流してしまっていたのである。

137

共犯 新聞・テレビは官邸の走狗ではないか

官邸側は記者に、まずは食事をおごり、ゴルフに連れて行き、野球の観戦チケットを渡すといった簡単なところから始める。そして1万円でもいい、お車代で

その部下へと継承される。良識あるはずの記者たちが、いとも簡単に「毒まんじゅう」を食らってしまう仕組みはどうなっているのか。

官房機密費に汚染された記者は、もはや官邸と「共犯関係」にあり、「政治とカネ」の問題を厳しく追及することなど不可能だ。

現場記者が集めた膨大な取材メモが、官邸に「上納」されていたという問題はその典型だ。現場の記者たちが夜打ち朝駆けをして各政党、派閥のキーマンなどからとってきたオフレコの内容が、政治部長や編集局長にあげられる。それを幹部

たちが、機密費と引き替えに官邸に流してしまっていたのである。

137

比較に次ぐ比較！

SNS vs ツイッター
川上・巨人 vs 原・巨人
マンション買ったと借りる？

大人のくらしを大事典

週刊ポスト編集部編
絶賛発売中！！

定価945円(税込)
小学館